

## 中学校社会科における歴史の異文化を大観する学習

### － 「犬」の絵画史料を通して －

教科教育高度化分野(20821001) 門脇明保

本研究では、弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、大正時代における「犬」が描かれた絵画史料を活用して歴史を大観する授業を開発した。授業実践の結果、「犬」がその時代の人々の暮らしや考え方、政治の在り方を反映していることに気づかせることが出来た。課題として、生徒が「絵画史料」で学んだ直感的なイメージを「歴史的事実」に照らし合わせて精緻にしていかなければならないことが明らかになった。

[キーワード] 中学校社会科, 歴史的分野, 異文化理解学習, 歴史教育

#### 1 問題の所在

本研究の目的は、「犬」を素材にして、日本の歴史を大観することにより、各時代の特色を大きく捉え、各時代の共通点や相違点に着目して、人々の暮らしや考え方の違い(異文化性)を生徒がどのように捉えるかを明らかにすることである。

歴史を「異文化」として捉えるとはどういうことか。深草(1995)は、次のように述べる。

現在地球上に存在するさまざまな文化を、それぞれに絶対的価値を持つものとして文化相対主義の立場に立って捉えなければならないとするなら、それと全く同様な考え方が、古代・中世・近代・現代のそれぞれの文化にもあてはまるのではないか。

深草は、同時併存的な現代諸文化を「ヨコの異文化」、時系列的に存在する歴史的な諸文化を「タテの異文化」とした。

本研究は、「犬」を通して「タテの異文化」を大観する授業の開発を目指した。次に本研究における授業において、なぜ犬を題材にしたのかを説明する。人間と動物の関係性について真辺(2021)は次のように述べる。

動物は人間にとって、あるときには愛すべきペットであり、あるときには食材や商品であり、またあるときには実験材料である。このような、決して一筋縄ではいかない複雑な関係は、過去にさかのぼることによって、さらに複雑さを増し、変化に富んだものとなる。そうし

た意味で、動物の歴史を考察することは、動物という他者、歴史という過去を通して、人間社会のあり方を照らすことにつながるのである。

人間の動物への対応やその扱いは時代や地域によって様々であった。愛すべき存在として扱われる一方で、食材や商品といった「モノ」のような扱いもされてきた。動物に対する扱い・対応には、その時代の人間の暮らしや考え方、健康状態や政治の在り方といったものが現れている。

本研究では題材として、①弥生時代、②平安時代、③鎌倉時代、④室町時代、⑤江戸時代、⑥大正時代の6つの時代に「犬」が描かれた絵画史料と、各時代の「犬」や当時の人々について書かれた文献資料を用いる。

「犬」が各時代においてどのように描かれていたかを分析し、整理することにより当時の人々の生活や様子が浮き彫りになる。そこから、「犬」を通して当時の人々の感情や考えにまで迫っていくことが出来ると考える。最終的には、時代ごとの特徴や特色についても学ぶことができる。

授業実践では、まず生徒が各時代に描かれた犬についての絵画史料や文献資料を読み取り、各時代の犬の姿にネーミングする。そして、それぞれの時代の犬のネーミングを比較することで、過去と現代の価値観や文化の違いに気づき、歴史を大観して考えられる。つまり歴史を「異文化」と捉えられるようになることを考える。

#### 2 先行研究の検討

歴史の異文化性を理解するために、絵画史料を

活用した。日本の歴史学習では、「絵画」を歴史の「史料」として利用することは、これまでも行われてきた。しかし、その活用は、「挿絵」的な利用であり、積極的に「絵画」作品と対話し、読解するものではなかった。

黒田(1986)は、次のように述べている。

「絵画史料」に描かれているモノやコトがどのようなものであり、なんという名であるのかを明らかにできたなら、それは日本史をイメージ豊かなものにしていく上で貴重な貢献をしたことになるだろう。(中略)文字資料からでは分からない「ビジュアル」な面や五感などを通して歴史性を探る試みを行うことが必要である。

文献資料だけでは分からない、「絵画史料」が持っている「ビジュアル」的な側面を通して歴史を学ぶことは、それまで生徒が持っていた歴史のイメージをより豊かなものにできると考える。

「絵画史料」には当時の人々の様子が動きや表情だけではなく、色彩や構図などでも表現されている。なぜ、このような表現をしたのか。なぜ、このような描き方をしたのかという疑問を生徒が持つことにより、歴史を新しく調べるきっかけになり、その時代の特徴や特色といったものも見えやすくなると考える。

絵画史料の特性について加藤(1995)は「文献資料と違って自ら歴史を言語的に語ろうとはしない」と述べている。文字史料と違い、絵画史料には人物や風景、当時の様子が細かく描かれている。絵画史料には、見ている側が一目で分かる情報と見ている側が考えなければいけない情報が存在している。絵画史料からその当時の「歴史」を探ろうとした時、見ている側が主体的に歴史的な意味や事実を読み取る必要がある。絵画史料を読み取る際、今まで持っていた既存のその時代に対する「漠然としたイメージ」の中で、絵画史料に描かれている事実を読み取ろうとする。その際、生徒は自分の知識やイメージだけでは対応できない事実気づく。

本研究で扱う「犬」の絵画史料研究とその時代の「犬」についての先行研究は次のように整理できる。

#### ①弥生時代

絵画史料は、「文晁旧蔵銅鐸と伝香川銅鐸の絵

画」の一場面を授業で使用した。この場面では、犬と人々が獲物を追い詰め、一緒に狩りをしている様子が描かれている。

当時の犬は、貝塚に丁重に埋葬されており、弥生人が犬を大切な存在として扱っていたかを読み取ることが出来る。

生徒には次の資料を用意した。

・貝塚で発見された犬。  
貝塚から発見された動物の骨はバラバラに散乱し、こげているものがほとんど。  
しかし、加曽利貝塚で発見された犬5体は、いずれも骨格がそろい、穴の中に丁重に埋葬されていた。  
出典『考える日本史授業2 絵画でビデオで大論争!』<sup>1</sup>

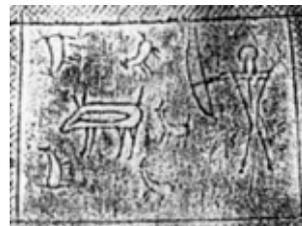


図1 文晁旧蔵銅鐸と伝香川銅鐸の絵画  
東京国立博物館所蔵

<https://webarchives.tnm.jp/東京国立博物館>  
(最終閲覧日 2022年1月24日)

#### ②平安時代

絵画史料は『弘法大師行状絵詞』の第七巻に描かれている一場面を授業で使用した。この場面では、天下に災いが起き、人々が疫病や飢餓で苦しんでいる様子が描かれている。亡くなった人や、死を待つだけになっている人など、この時代の悲惨さが描写されている。

生徒には次の資料を用意した。

…天下に疫病の災いが起こり、国中で若くして死ぬ者が続出した。  
野原では、人の死体が転がり、村や里は鬼の住処になってしまった。それを鎮めるために、天皇が「般若心経」を書かれ、大師がその教えを説き、人を導いた。その後、蘇生する病人が続出した。  
出典『弘法大師行状絵詞』<sup>2</sup>

この絵画史料は犬が人の死体を食べているシーンを描いている。平安時代の絵画史料や文献資料では、人の死の近くには犬やカラスが描かれていることが多い。平安時代の犬は、家や街路、墓地の残飯・汚物・死体など環境を浄化するものとして捉えられていた。

死体処理など、不浄な存在として扱われると同時に犬は「神」ないし神の使いとして捉えられている部分もあった。墓地など「死」を司る場にも描かれ、死の世界と生の世界との間を行き来する境界的な動物として意識されていた。



図2 『弘法大師行状絵詞』巻七  
和泉市久保惣記念美術館蔵 <http://www.ikm-art.jp/>「和泉市久保惣記念美術館デジタルミュージアム」(最終閲覧日2022年1月24日)

### ③鎌倉時代

絵画史料は『犬追物図屏風』の一場面を授業で使用した。武士数人が的として犬を追いかけて射る武芸の鍛錬の一種として「犬追物」が誕生した。鎌倉御所の南庭で行われるようになった「犬追物」は、『吾妻鏡』にも記載がある。

生徒には次の資料を用意した。

幕府御所の南庭において行われた犬追物は、犬20匹で、はじめの10匹は1匹ごとに射手を指名して行ない、のこる10匹は射手がみずから名乗って射た。射手は小山朝長・三浦泰村・氏家太郎・横溝六郎の4人。三浦義村が検見、島津忠義が申次をつとめ、若君をはじめ、北条義時ら御家人が群参、見物した  
出典『吾妻鏡』<sup>3</sup>

この時代の犬は武士にとって鍛錬の道具の一部であった。

鷹狩りのお供として犬を伴ったり、鷹に食べさせる餌にしたり、その扱いは多岐にわたっていた。



図3 『犬追物図屏風』  
東京国立博物館所 <https://webarchives.tnm.jp/>  
東京国立博物館(最終閲覧日2022年1月24日)

### ④室町時代

絵画史料は『洛中洛外図』の上杉本の一場面を授業で使用した。この場面では、京都の都市にいる野犬を捕獲しようとする場面が描かれている。

生徒には次の資料を用意した。

この時代には、野犬を捕獲する「犬狩り」がいた。「犬狩り」については奈良春日社の神鹿を襲う野犬を捕獲する室町初期の例が知られている。  
都市にいる飼われていない犬を、捕獲する道具を使い、一人は犬を手なづけ、もう一人は、犬を捕獲する道具を使って犬を捕えていた。捕えられた犬は、犬肉として食べられたり、様々な用途に使われたりしていた。  
出典『国宝 上杉本 洛中洛外図大観』<sup>4</sup>



図4 「上杉本 洛中洛外図屏風 右隻 4扇(部分)」米沢市(上杉博物館所蔵)

### ⑤江戸時代

絵画史料は『熙代勝覧』に描かれている一場面を授業で使用した。江戸での生活の様子が描かれおり、子を抱いた母親二人が、足元で戯れる子犬3匹を眺めている様子が描かれている。

犬は人々の生活の側にあり、人々の近くに暮らし、町の生活の一部を成すものとして扱われていた。

この時代の犬は徳川綱吉が『生類憐みの令』を發布したことにより、犬は「飼犬」と「無主の犬」に分けられた。他にも、犬は中野に作られた犬小屋に収容・保護されていた。

生徒には、次の資料を用意した。

徳川五代將軍綱吉の發布した動物愛護のお触書。捨て子、捨て病人の禁止から牛・犬・鳥・魚介類などの動物の虐待・殺傷の禁止にまで及んだ。違反者は厳罰に処せられた。  
『生類憐みの令』により、犬は「飼犬」と「無主の犬」に分けられた。無主の犬のほとんどは町犬で、中野に作られた犬小屋に収容・保護された。  
出典『犬たちの明治維新 ポチの誕生』<sup>5</sup>



図5 『熙代勝覧』

山本博文『ビジュアルNIPPON 江戸時代 「原寸大」絵画史料で読み解く江戸時代 270 年史』(2006) 小学館 p. 205

### ⑥大正時代

絵画史料は『東京停車場之図』に描かれている一場面を授業で使用した。日本最大のターミナル駅となった東京駅は、鉄道を利用する多くの学生やサラリーマンで賑わっている様子が描かれている。この時代の犬は『畜犬規則』という法令が発布されたため、飼い犬以外の犬は全て殺されてしまった。犬は、町で管理される存在から、個人で所有するものへと変化していった。

生徒には次の資料を用意した。

- 一 畜犬(飼犬)には首輪をつけ、飼主の住所氏名を木札に明記し付けること。ただし無礼の分はすべて無主とみなし、これを殺すべし。
  - 一 狂病にかかる犬はその飼主、これを殺すべし。
  - 一 畜犬、人を殺傷する時はだれにてもこれを打ち殺し、飼主は怠慢の責任を逃れることはできない。かつ相応の賠償金を支払わせる。
- 出典『畜犬規則』<sup>6</sup>



図6 『東京停車場之図』  
帝国書院『社会科 中学生の歴史』p. 224

## 3 実践と結果

### (1) 単元の構成

2021年11月2日から11月9日、山形県内のA中学校に全2時間で実践した。

本単元の目標は、「各時代の絵画史料に描かれた『犬』に着目し、当時の人々の価値観や文化を比較することを通して、歴史の『異文化性』に気付き、歴史を『異質』なものとして見るという新しい捉え方を養う」ことである。

#### ○単元名

「君も歴史学者になろう！人間にとって犬はどんな存在だろう？」

#### ○単元の過程 全2時間

時	学習目標と主な学習活動
1	<p>目標：各時代の絵画史料や文献資料に描かれている「犬」を見てその描かれ方から自分なりの言葉で、各時代の犬にネーミングをつけることができる。(思考力・判断力・表現力)</p> <p>・今までの歴史が「人」に着目していたことを確認し、現在の私たちの身の周りにはどんな動物がいるか考える。</p> <p>・「人」の歴史にはどんな動物が一番身近にいたか教科書を読んで考える。</p> <p>・絵画史料を見て、どの資料がどの時代に対応しているか予想を立てたら、その時代の犬はどんな存在と呼べるのかネーミングを考える。</p>
2	<p>目標：「犬」を通して歴史の「異文化性」に気付き、自分たちの価値観と過去の価値観は違う可能性があるという認識で事象を捉え、自分なりの言葉で文章としてまとめることができる。</p> <p>(思考力・判断力・表現力)</p> <p>・前の時間で考えた「犬」のネーミングを見て、共通点と相違点を考える。</p> <p>・犬の扱いの違いが人々の生活の変化や価値観の違いによるものだということを学ぶ。</p> <p>・「犬」の扱いについて大観して見た時にどんなことを考えた発表する。</p>

### (2) 実践について

1 時間目では、先行研究で挙げた6つの絵画史料と、各時代の犬や人々の暮らしについての資料を配付した。

2 時間目では、生徒が絵画史料と当時の人々の暮らしの資料を読んで、各時代の犬はどんな犬と呼べるのか、ネーミングした。

以下は生徒が犬のネーミングを発表した発言をまとめたものである。

弥生時代	理由
①お手伝い犬	弥生時代の狩りの時に、人間のお手伝いをしていたことからお手伝い犬と名付けた (NI)
②猟犬	絵画史料でイノシシみたいなのを人と一緒に猟をしているように見えたから (EH)
③食用犬	貝塚で発見されたから、縄文人も食べていたと思ったから (IN)

弥生時代の絵画史料には、弓を構えた人と犬が5匹、イノシシが1匹描かれている。YDくんは犬が描かれているということに気が付かず、「エビフライが5匹いる」と発言していた。絵画史料の読み取りは、読み取っている生徒に大きく依存するため、自分の知識にあるものと照らし合わせて理

解しようとしていることが分かった。

生徒達が絵画史料や文献資料から次のようなことを捉えていた。

「貝塚」を「昔の人が食べ物を捨てていた」という記述から、弥生時代の人間は犬を「食用」として食べていたのではないかと指摘した生徒がいた。教師側としては、「他の動物が食べられた跡があることに対して、犬は五体満足で丁重に埋葬されていた」点に着目することで、犬は他の生き物と違った扱いを受けていたという部分に気づいてほしいという意図があった。しかし、「貝塚から発見された」という点から生徒は今まで習った知識を活用し、「貝塚＝人が食べたものを捨てる場所」と解釈した上で「食用犬」や「食べられ犬」と表現していた。

絵画史料と生徒が向き合う際、生徒は既存の知識を基にして、その当時の様子を掴もうとすることや、絵画史料と直面した時の直感を大事にして絵画史料に向き合うことが分かった。

平安時代	理由
④衰弱犬	「犬が細く痩せている姿で描かれているので犬に見えない」 ↓ この時代は人間だけではなく、犬も困窮していたと考えたから (OK)
⑤掃除犬	平安時代は資料に書いてある通り疫病が流行っているということで死んでる人がいて、この絵にもあるように、死んだ人を犬が食べてることで、死体を掃除してるから (TY)
⑥死体処理犬	人の死体を犬が食べていたから (KR)

平安時代について、『弘法大師絵詞』の一場面について多くの生徒が痩せた人間やその様子について着目していた。犬が人間の死体を食べていることに気づくことが出来ず、「これは何を描いているのか？」と悩んでいる生徒がいた。

生徒達が絵画史料や文献資料から捉えたことは次の 2 点である。

1 点目は、人間の状況に対して犬の状況も同じように変化していると気づいた点である。

OKさんは、人間が貧困に苦しんでいる時、その一番近くにいた動物である「犬」も同じ状況に陥ってしまったため、人の死体を食べるしかなかったのではないかと推測していた。

2 点目は、「平安時代」の犬の役割について考え

ていた点である。疫病が蔓延したため、道端などに死体が転がっているという普段では全く考えられない状況が広がっていた。人々が死体を片付けられない状況の中で、同じように飢餓状態にある犬が人を食べて掃除していたと捉えていた。

普段生徒が感じている「犬」という存在について、そのイメージや捉え方が一気に変化したのが平安時代であったと考える。生徒は、「犬」が人を食べるというショッキングな事実と出会った。その中で、生徒は、人々の様子と犬の様子が結びついているのではないかとこの考えにたどりついていた。

鎌倉時代	理由
⑦遊ばれ犬	文献資料から、武士が犬を使って遊んでいるように思ったから (NI)
⑧道具犬	道具のように、武士に追われたり、使われているのを見て道具のように扱われていると思ったから (NA)

鎌倉時代について『犬追物図屏風』について、武士が犬を追いかけて狩っているのではないかと推測している生徒が多くいた。人が動物を狩っている絵画史料であったためか、犬も人に「狩られる対象」になっていたのではないかと推測していた。絵画史料だけで読み取れない部分については『吾妻鏡』に記載されている。しかし、絵画史料の読み取りは出来ていても、文献資料と関連させて考えている生徒は少なかった。

生徒達が絵画史料や文献資料から次のようなことを捉えていた。

文献資料から、「犬」が道具として武士に扱われていたと推測している点である。

NIさんは、「武士が犬を使って遊んでいるように思った」と発言した。NIさんにとって、矢を向けられて射られている犬は、「遊びの一つ」として利用されていたと捉えたと考える。

室町時代	理由
⑨利用 (され て) 犬	普通になんか町の中にいる犬を捕えていたりして、大切に思っていないのかなって…だから、狩りとかに利用されることもあったから、利用されてたから (NA)
⑩餌犬	犬狩りをしている人がいて、優秀な犬は鷹狩りのお供として飼われていたんですけど、そうではない犬は鷹の餌として、殺されていたから、鷹の餌とされていたから、餌犬と考えた

	から (WM)
--	---------

室町時代について『洛中洛外図屏風』では、描かれている内容の情報が少なかったためか、生徒が一番苦戦しながら取り組んでいた史料であった。文献資料の説明ではこの時代の「犬狩り」の様子であると説明したが、イメージを浮かべるのが難しかった様子であった。

生徒達が絵画史料や文献資料から捉えたことは次の2点である。

1点目は、「犬が大切にされていない」と捉えた点である。『洛中洛外図屏風』の犬狩りの場面を見て、犬は人に「利用されていた」と感じていた。他にも、捉えられている様子や、犬は鷹狩りのお供にされたり、食用にされたりしているのを見て「大切にされていない」とも考えていた。

2点目は、犬を生き物としてではなく「餌」として捉えた点である。この時代の犬は、他の生き物に利用される側面が強かったとして、一番印象に残った鷹の餌という部分に着目し、「餌」と表現した。現代の扱いとはまるで違う部分に着目し、一番印象的に残ったことをネーミングしたと考えられる。

江戸時代	理由
⑪貴族犬	生類憐みの令が出されて、犬の位が人間より上になったから、人に大切にされたと思ったから (NI)
⑫保護犬	生類憐みの令で守られているっていうか、保護されてる中に犬がいるので保護されているなあとと思って保護犬にしました (KR)

江戸時代について、『熙代勝覧』では女性と子どもが子犬を眺めている図という限定した場面を選択した。そのため、生徒は文献資料として載せた「生類憐みの令」に着目して考える生徒が多かった。

生徒達が絵画史料や文献資料から捉えたことは次の2点である。

1点目は、「生類憐みの令」という動物愛護が強くなる法令が出された結果、犬の扱いが今までの時代よりも好待遇になったのではないかと考えた点である。小学校で学んだ知識や元々持っているイメージなどを使い、「犬は大切に扱われていた」と捉えている生徒が多かった。

2点目は「犬」と「人間」の関係が変化してきたことに注目している点である。「生類憐みの令」を

通して、人よりも犬が優遇されていたと考えたことから、平民よりも上の存在である「貴族」という言葉で表現している生徒がいた。犬は「保護され」、「殺してはいけない」上に、人間が世話をしなければいけないことから、そう捉えたと考える。

今までの時代での犬の扱われ方に着目し、犬は狩られる対象や人間に弄ばれる存在から、人が「保護する対象」へと変わっていったことに気づいている生徒が多かった。

大正時代	理由
⑬ペット犬	首輪を付けられている上に、人に飼われているから (NI)
⑭飼育犬	人に飼われているから (WI)

大正時代について、『東京停車場之図』を読みとっていた生徒はそこに描かれたものが「東京駅」であることに気づいている生徒が多かった。ここでは、文献資料として「畜犬規則」を挙げ、犬を地域で世話するものから個人で所有するものへと変化したことが読み取れていた。

生徒達が絵画史料や文献資料から次のようなことを捉えていた。

絵画史料から現代との共通点を見だし、今の犬と人間の関係性に近いことに気づいた点である。「首輪をつけている」というこれまでの時代にはない部分に着目し、大正時代の犬は、今と近い扱われ方や飼われ方をしていたのではないかと考えていた。

#### 4 全体的考察

(1) 生徒は歴史をどう捉え直したのか

「これからの歴史学習で大切にしたい見方・考え方書こう」という発問を提示した。その際、各時代を「犬」を通して見た時の各時代の共通点と相違点は何かを考えてもらい、分類分けをした上で、この授業のまとめとした。

今回の2時間の授業を通して生徒は歴史をどう捉え直すことができたのかについて考察する。

生徒名：①SRさん

共通点と相違点	犬を通して見た歴史
・江戸時代や大正時代は今と同じで大切に扱われていたり、ペットにされているので似ていると思いました。	・犬を調べてみて、昔から今までずっといる犬だが、どちらかと言えば殺されたり、つかまつりなどの時代が多いことが
・他の時代は今とはあまりち	分かりました。人と犬との関係

<p>がく (特に平安時代), 弓で殺したり, 捕まえたりしていることが多いんじゃないかと思いました。</p> <p>・犬はずっといるが, 人間の体調に合わさっていると思っ</p>	<p>性は歴史の人物によって変わることを思って, 人がきびしかったら犬もそうなるし, 人が食べ物なくなったら犬もなくなるなどなっているのではないかと思います。</p>
--	---

SR さんの捉え方には, 次の 2 つの特徴がある。

1 点目は, 「犬が大切にされているか」という点から, 「大切にされていた時代」と「犬にもきびしい時代」という新しい時代区分で歴史を捉えていることである。前者が江戸時代と大正時代にあたる。後者がほかの時代, 特に平安時代にあたる。これは, 平安・鎌倉・江戸・大正という政治史を中心とした時代区分を, 人と犬の関係から大きく捉え直したものと言える。

2 点目は, そうした犬に注目した時代区分を, 人々の暮らしと関連づけていることである。SR さんは, 次のように述べている。

「人と犬との関係性は歴史の人物によって変わることとあって, 人がきびしかったら犬もそうなるし, 人が食べ物なくなったら犬もなくなるなどなっているのではないかと思います」

SR さんは, 人の近くにいた犬は, 人と共存しつつ, その時代を表す鏡のような存在になっていたと気づいたと推測する。「犬はずっといるが, 人間の体調に合わさっている」という記述は, 人の健康状態や疫病と犬の姿が関連していることを表しているともみることができる。

生徒名: ②SA さん

共通点と相違点	犬を通して見た歴史
<p>・色々な時代によってあつかわれ方が異なる。</p> <p>・平安時代を除いて, 各時代では大切にされ方が違う</p> <p>・安定した政治の時代は犬も大切にされている。</p>	<p>大切にしたい見方・考え方は 1 つの事を色々な方向から見ることだと思いました。</p> <p>例えば鎌倉時代だったら「道具犬」「遊ばれ犬」と言われていてもちがう意味で大切にされていると思うので, 色々な方向から見るのが大切だと思います。</p> <p>・今回, 犬について考えてみて, 犬は人間にとって身近だったけれどあつかわれ方がちがって, 道具のようにするの</p>

	<p>はかわいそうなので, 現代では大切にしたいです。</p>
--	---------------------------------

SA さんは犬を「人間にとって身近で大切にしたい存在」として見ている。SA さんからすると, 平安時代以外は, 犬は「大切にされて」いた。だが, その「大切にされ方」は時代によって違う。そして, 鎌倉時代は一見「道具犬」として犬は大切にされていないようだが, 「違う意味で大切にされていると思う」と推測している。

多くの生徒が鎌倉時代の犬を「道具犬」とみる中で, 「人と犬との大切な関係」という現代的な関心から鎌倉時代を捉え直そうとしている。

生徒名: ③K0 さん

共通点と相違点	犬を通して見た歴史
<p>・犬が大切にされている (現代と似ている)</p> <p>→ 弥生時代, 江戸時代</p> <p>・犬が少しかわいそう</p> <p>→ 鎌倉時代 (鎌倉時代は平安時代のこともあったからだと)</p> <p>大正時代, 室町時代</p> <p>・平安時代は今とぜんぜんちがう</p> <p>・時代ごとに身近にいても扱いがぜんぜんちがう</p>	<p>・資料をしっかりと見たり, 色々な視点から学習して, かたよりのない意見にしたい。</p> <p>・歴史はやはり答えが決まっていなくて, (今の人がたしかめたわけではない) 色々な人の, 色々な意見が大切だと思う。</p>

K0 さんは, 「犬が大切にされている時代」と「犬が少しかわいそうな時代」, 「全く大切にされていない時代 (平安時代)」と新しい時代区分を行っている。現代的な関心から時代を区分する点は SR さんや SA さんと同じと言える。

しかし, 他の 2 人に比べると, K0 さんには 2 つの特徴がある。

1 点目は SR さんのように暮らしと繋げていない点である。犬と人々の暮らしが関係していたということを指摘していない。

2 点目は SA さんの鎌倉時代の犬についての探究のような思考がみられないことである。現代とその時代の比較を行うことは出来ている。しかし, そこから新たな探究が見られなかった。

3 人の生徒の意見を分けて見た時に, どの生徒も「犬」の扱いと時代について言及している。時代を追うごとに, 犬も時代ごとに, 人と同じように変化していると指摘している。

犬を通して歴史を大観したことによって、生徒たちは時代によって人間と動物の関係には現代と比較すると共通点や相違点があるということを描いた。このことから3点考察する。

1点目は、「犬」という素材から歴史を大観したことにより、今まで政治の拠点などで分けられてきた平安・鎌倉・江戸といった時代を新しい時代区分として捉え直した点である。

「犬が大切にされていた時代」、「犬にもきびしい時代」と分けて新しく時代区分を捉え直した。

2点目は、「犬」という教材から歴史を見たことにより、そこに生きていた人々の暮らしや考え方、健康状態、政治の在り方を反映していると気づいた点である。

SRさんは「人と犬との関係性は歴史の人物によって変わることと思って、人がきびしかったら犬もそうなるし、人が食べ物なくなったら犬もなくなるなどなっているのではないかと思いました」と述べている。このことから、「犬」は「人間」の暮らしに結びついてるため、「人間」の暮らしによって「犬」の扱いは変わっていると指摘した。

3点目は、現代の人と犬との接点から時代の新しい探究に向かった点である。SAさんは、「例えば鎌倉時代だったら「道具犬」「遊ばれ犬」と言われていてもちがう意味で大切にされていると思うので(中略)」と述べている。SAさんは、鎌倉時代の犬に対して他の生徒とは違った意味付けを行っている。多くの生徒は鎌倉時代の犬を「道具犬」という一面から見ていることに対して、「他の大切にされる方もあったのではないかと指摘した。「異文化」に注目することは、その時代の新しい探究に繋がる思考が生まれると考える。

## 5 到達点と課題

本研究の到達点は2点指摘できる。

1点目は、歴史を大観したことにより、これまでの政治史中心だった歴史の時代区分とは違い、「犬」を通して新しい時代区分を捉え直した点である。

2点目は、「犬」という素材から、人間との暮らしの結びつきを捉え直したり、現代と人と犬の接点から新たな探究に向かったりしていることが分かった。

本研究の課題は次の点である。

生徒が捉えた歴史のイメージと「歴史的事実」を結び付けることが出来なかった点である。歴史

のイメージと「歴史的事実」の結びつきを明確にしていく必要がある。直感的な把握を「歴史的事実」に照らし合わせて精緻にしていかなければならない。直感的な捉えと時代の事実を結び付けることにより、その時代の理解にも繋がっていくと考える。

## 注

- 1) 加藤公明(1995)『考える日本史授業2 絵画でビデオで大論争!』, 地歴社, p. 14
- 2) 小松茂美『続日本絵巻大成5 弘法大師行状絵詞 上』, 中央公論社, p. 124
- 3) 谷口研語(2012)『犬の日本史-人間とともに歩んだ一万年の物語』吉川弘文館, p. 54
- 4) 柳町敬直(2001)『国宝 上杉本 洛中洛外図大観』, 小学館, p. 161
- 5) 仁科邦男(2014)『犬たちの明治維新 ポチの誕生』, 草思社, p. 6
- 6) 仁科邦男(2014)『犬たちの明治維新 ポチの誕生』, 草思社, p. 189

## 引用・参考文献

- 深草正博(1995)『社会科教育の国際化課題』, 国書刊行会.
- 加藤公明(1995)『考える日本史授業2 絵画でビデオで大論争!』, 地歴社.
- 黒田日出男(1986)『境界の中世 象徴の中世』, 東京大学出版会.
- 黒田日出男(1986)『姿としぐさの中世史』, 平凡社
- 仁科邦男(2014)『犬たちの明治維新 ポチの誕生』, 草思社.
- 真辺将之(2021)『猫が歩いた近現代-化け猫が家族になるまで-』, 吉川弘文館.
- 谷口研語(2012)『犬の日本史 人間とともに歩んだ一万年の物語』, 吉川弘文館.

*A Practice of Overlooking the Chronological-culture of Japanese History in Junior High School Social Studies Course: From the Viewpoint of the Dogs pictured in Historical Resources*

Akiho KADOWAKI